

# 川縁から

川縁（かわべり）から。

先ず「川」とは、現世一來世の境界を比喩的に表現したもの。とは言っても、現世はともかく、来世があるのか分からないし、そもそも「川」があるのかも定かではない。

次に、「縁」とは、現世側の最終ライン。片足でも「川」に踏み入れれば、不可逆的に現世から離別したと定義されることになる。しかしながら、その「縁」すら「川」という虚無を前提とした各個人々々の空想であるから、空論となるのだが、とても気になる。

いったい「川縁」はどういった風景なのか、そこに立つと、どのような心境になるのか、こちらから近づくものなのか、果たして、向こうから近づいてくる来るものなのか。

片足を踏み入れ「川縁」から戻ってきた人の話は聞いたことが無い。一方通行なのであろう。当文は、生物学的な「死」を語った臨死体験の報告事例ではなく、どちらかと言うと「川縁から」の哲学的・精神論的な自意識や心理が、どのように変化するのかを中心に考察するものであり、また、生物学的な意味の臨死の状態を想像したものでもない。

年齢や男女、社会的な背景（地域や宗教観）の違いから、「川」や「縁」の考え方が、全くない方も少なくないかもしれない。また、たとえ「川」やその「縁」についての概念があったとしても、それらには大なり小なり”温度差”があるのであろう。

もし、「その川には水が流れているのか」と考えるなら、それは、川縁に立った時のその人の心理状態が「水の具体的な有無」または「水が見えるか見えないか」を左右するのではない。例えば、現世に全く未練が無く、進むべき方向や道を明確に認識している場合には、その有無や見える見えないは、無効である。所謂「お導き」のまま歩みを進めれば、その行く先は、望み通りとなるのであろう。一方、強い未練や煩惱、また、やり残したことが多ければ多い程、水は深く、激流と映るのであろう。その上、下手すると、その激流に流され、その行く先は、彼の望む処ではない方向へ流されてしまうことを当人も十分に理解し、そこから逃れようと、「必死」になって、その流れに対峙させられることとなる。「川」に足を踏み入れたことは、前述の「不可逆的な現世からの離別」＝「死」となるのだが、その「川」で、もう一度「死」を迎えることになるが、定かではない。

そうならないために、どのように「川縁」に近づくのか。または、「川縁」に近づくにあたっての「心構え」をどのようにすればよいのか。何をすれば良いのかは、分からない。

「川縁」に近づいているのは、間違いなく事実だが、その事実から逃れられるものでもないし、近づくスピードを鈍化させることもできない。ただひたすらに「川縁」に立つ日が来ないことを祈り、結果、立つことになっても、無事に渡り切る事を願うしかない。